

Title	ウージェーヌ・シュール『パリの秘密』における娼婦像
Author(s)	村田, 京子
Citation	国際文化. 2004, 5, p.23-56
Issue Date	2004-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/2687">http://hdl.handle.net/10466/2687</a>
Rights	

## ウージェーヌ・シュー 『パリの秘密』における娼婦像

村 田 京 子

ウージェーヌ・シュー (Eugène Sue) は、ナポレオン帝政時代の幕開けとなる1804年のパリに生まれた<sup>1</sup>。シュー家は代々、優秀な外科医やアカデミー会員を輩出している名門の家系で、ウージェーヌの父親も帝政時代には近衛軍の主任外科医として、レジョン・ドヌール章を佩用し、王政復古時代には王立病院の院長に任命されるなど、医者として華々しい経歴を誇っていた。息子のウージェーヌも当然、外科医となって父の後を継ぐことが期待されたが、その期待に反して、彼は作家の道に進み、新聞小説作家として名を馳せることになる。ウージェーヌ・シューとほぼ同時期に生まれ、親交の深かったアレクサンドル・デュマ (Alexandre Dumas) は、シューの死後、彼の人生を回想して、「屈託のない、陽気な子ども」、「落ち着きのない、懐疑的な青年」、「幻滅して悲しげな男」という3つの局面に還元している<sup>2</sup>。デュマは、シューの子ども時代に関しては、彼が勤勉とはほど遠い少年時代を送ったこと、その中でもとりわけ、父親の貴重なワインを遊び仲間と次々に飲み干して、父の逆鱗に触れたエピソードを詳しく紹介している。息子の素行に手を焼いた父親は、1823年に息子を軍医の副助手としてスペイン戦線に送り出す。ウージェーヌはスペイン各地を転々とした後、1824年にはアンダルシア地方のカデイス病院に、25年にはツーロンの陸軍病院に配属されるが、ツーロン

---

1 ウージェーヌ・シューの戸籍上の名はマリー・ジョゼフ・ウージェーヌ (Marie-Joseph-Eugène) で、ナポレオンの妻ジョゼフィーヌ・ボナパルト (Joséphine Bonaparte) を代母に、ジョゼフィーヌの息子のウージェーヌ・ボーアルネ (Eugène Bauharnais) を代父に持つ。彼は、代父にちなんでウージェーヌと呼ばれることとなった。なお、ウージェーヌ・シューの伝記的な事項に関しては主に、Jean-Louis Bory, *Eugène Sue*, Hachette, 1962 及び « Eugène Sue vu par Alexandre Dumas », *Document dans Les Mystères de Paris*, Bouquins, Robert Laffont, 1989 を参照した。

2 Alexandre Dumas, *op.cit.*, p.1315.

で辞表を提出してパリに立ち戻る。この頃から第二段階の青年時代が始まる。それは、ジャン＝ルイ・ボリ (Jean-Louis Bory) の言葉を借りるならば<sup>3</sup>、「きざな男 (mirliflore)」から「洗練された男 (fashionable)」に変貌した時期であった。ウージェーヌは多額の借金をして、ダンディに不可欠な二人乗り二輪馬車 (tilbury) や幌つき馬車 (cabriolet)、馬、馬丁 (groom) を手に入れ、流行の衣装を身にまとい、パレ・ロワイヤルやブルヴァール・デ・ジタリアンを闊歩した。やがて彼は、ブルヴァールの店でも最も人気のあったトルトニーやカフェ・ド・パリの常連となり、ライオンと呼ばれた裕福でダンディな青年たちの代表格となる。息子の浪費と放蕩に憤った父親は、息子をパリから遠ざけるべく海軍に送り、ウージェーヌは1826年から27年にかけて再び、軍医補佐としてアンティュー諸島や近東地方に赴くことになる。その経験は後に、バイロン卿 (Lord Byron) やクーパー (James Fenimore Cooper) の影響を受けて書いた彼の最初の小説『海賊ケルノック』 (*Kernok le Pirate*) (1830) など、一連の海洋小説の中に反映されている。1830年に父の死によって莫大な遺産を手にしたウージェーヌは、パリでダンディとして派手な生活を再び始める。更に7月革命によって王政復古から7月王政に変わったことで、それまで頑なに貴族性を守ってきたフォブール・サン＝ジェルマンのサロンの扉が彼の前に開かれるようになる。シューは一躍、上流社会の寵児となり、オルセイ伯 (comte d'Orsay) と親しく交際し、シーモア卿 (Lord Seymour) が1832年に創設した名門のジョッキークラブの一員ともなっている。その頃の彼の作品は、バイロン風のサタニズムに色づけられ、ブルジョワ道徳を逆なでする諧謔的な精神に満ちたものであった。1837年にシューは、ルイ14世の治世の舞台裏を暴く『ラトレオーモン』 (*Latréaumont*) という歴史小説を書く。これは太陽王を貶める「大逆罪<sup>4</sup>」に値する作品として、王党派の新聞の糾弾の的となり、その結果、彼はフォブール・サン＝ジェルマンのサロンから追放の憂き目に会う。その上、数年にわたる浪費生活で、シューは遺産を使い果たし、破産に追い込まれてしまう<sup>5</sup>。貴族社会から見捨てられた彼

3 Jean-Louis Bory, *op.cit.*, p.68.

4 *Ibid.*, p.192.

5 シューの豪壮な邸の家具調度や、ダンディぶり、更に自らの破産の経験は、『パリ

は創作意欲をも失い、自殺を考えるほどになる。失意の彼を励まし、救ったのが友人のエルネスト・ルグヴェ (Ernest Legouvé) とグーボー (Goubaux) であった<sup>6</sup>。ここから、シューの人生は第三の局面に入ることになる。

グーボーに励まされたシューは、田舎に引きこもって『アルチュール』 (*Arthur*) を完成させる。それは「懷疑主義によって罰せられた懷疑主義者の物語<sup>7</sup>」で、主人公のアルチュールは作者の分身とも言える。ちょうどこの二年前に、エミール・ド・ジラルダン (Émile de Girardin) が創刊したプレス紙 (*La Presse*) に、バルザックの『老嬢』 (*La Vieille Fille*) が世界初の新聞小説 (roman-feuilleton) として掲載され、それを契機にアレクサンドル・デュマの小説の連載が始まるなど、新聞小説が隆盛を極めるようになっていた。『アルチュール』も、1837年から39年にかけてプレス紙に連載されている。また、1840年12月から41年9月にかけてプレス紙に『マチルド』 (*Mathilde*) が載り、批評家にも好意的に迎えられ、シューは流行作家の一員となる。彼の名を不動のものにした『パリの秘密』 (*Les Mystères de Paris*) もまた、1842年6月19日から43年10月15日にかけて、ジュルナル・デ・デバ紙 (*Journal des Débats*) に新聞小説として掲載された。この作品が新聞紙上に現れるやたちまち、身分の高い王侯貴族からブルジョワ、庶民に至るまで幅広い階層に熱狂的な反響を呼び起こし、デバ紙の発行部数が一桁増えるほどの大きな社会現象となる<sup>8</sup>。とりわけ、貧しい民衆は作者の中に自らの階級の代弁者を見出し、『パリの秘密』

---

の秘密』に登場するサン＝レミ子爵 (Vicomte de Saint-Remy) の描写の中にそのまま反映されている。

6 失意のシューが慰めを求めたのは、社交界とは縁のない堅実な生き方をしていたエルネスト・ルグヴェの所であった。シューの父親の最初の妻が父と離婚した後、ルグヴェの父親と再婚していて、エルネストはウージェーヌの姻族であった。グーボーはエルネストの友達で、シューの精神状態を心配したルグヴェがグーボーをシューの元に送り、彼を励ましている (Cf. Alexandre Dumas, *op.cit.*, p.1337)。それ以降、シューは作品の執筆に関しても、グーボーの忠告をしばしば仰いでいる。

7 Jean-Louis Bory, *op.cit.*, p.207.

8 ウージェーヌ・シューに宛てられた夥しいファンレターは現在、パリ市立歴史図書館 (Bibliothèque Historique de la Ville de Paris) に保管されていて、その中にはラマルティエヌやバイエルン大公からの面会依頼を告げる手紙なども含まれている。Cf. Jean-Pierre Galvan, *Les Mystères de Paris, Eugène Sue et ses lecteurs*, 2 vol, Harmattan, 1998.

は社会小説 (roman social) の名を冠せられるようになる。それ以降、シューはベランジェ (Pierre Jean de Béranger)、ラムネー (Félicité de Lamennais)、ジョルジュ・サンド (George Sand) と並び、19世紀における「社会主義・博愛主義の四大勢力<sup>9</sup>」の一翼を担うことになるのだ。シューが傲慢不遜なダンディから、プロレタリア階級を擁護する社会主義者に変貌したのは、劇作家のフェリックス・ピア (Félix Pyat) に連れられてフージェール (Fugère) という名の労働者宅を訪れ、夕食を共にした夜に遡る<sup>10</sup>。その後しばらくして、シューは編集者のゴスラン (Gosselin) から、ロンドンの「秘密」を描いたイギリスで評判の挿絵入り書物に着想を得た、パリを主題にした同種の企画を持ちかけられる。シューは躊躇してグーボーに相談するが、グーボーは、シューがこれまで扱ったことのない民衆 (le peuple) を描くように彼に勧め、次のように言っている。

この民衆は、あなたの本の中では垣間見ることすらないものです。あなたは民衆を軽蔑し、侮り、無に帰しています。あなたは民衆をゼロとみなしていますが、民衆のことは何も知らないのです。だから、民衆を見て研究し、評価して下さい。それは、物理学が分類し忘れた5番目の要素で、民衆独自の歴史家、小説家、詩人を待ち望んでいるのです。今日まであなたは、社会の上層の領域で十分生きてきました。下の階級まで下りて御覧なさい。そこには大きな苦悩、極端な悲惨さ、大きな犯罪があるでしょうが、同時に崇高な献身、偉大な美徳も存在しているのです<sup>11</sup>。

9 Sainte-Beuve, *Chroniques parisiennes*, 1876, cité par Jean-Louis Bory, *op.cit.*, p.293.

10 シューは、1841年にポルト＝サン＝マルタン座で上演されたピアの戯曲『二人の錠前屋』 (*Les Deux Serruriers*) を見て心を打たれる。しかし、屋根裏部屋で貧困に苦しみなながらも美徳を失わない労働者という芝居の内容に対して、シューは果たしてそれが現実に存在するのかと懐疑心を抱く。その疑問に答えるべくピアがシューを連れて行ったのが、工場長フージェールの家であった。フージェールはこざっぱりした服装で夕食の席に現れ、シューは食通のヴェロン博士と共に、フージェールの妻の手料理のポタージュに舌鼓を打つ。フージェールは文学や政治、経済、更にはサン＝シモン主義やフーリエ主義の思想にも精通していて、シューはこの労働者階級の男の知識の深さ、その見識の高さに衝撃を受ける。ピアによれば、その夕食の席で、シューは靈感を受けたかのように突然立ち上がり、「私は社会主義者になった！」と叫んだと言う (Cf. Jean-Louis Bory, *op.cit.*, pp. 228-232)。

11 Alexandre Dumas, *op.cit.*, p.1342.

グーボーは続けて、シューがこれまで「肉体の医者」として、身体の治療法を求めて悪臭を放つ腐敗した死体を探ってきたように、「魂の医者」として、心の治療法を求めて悪臭を放つ腐敗した社会を探らなければならないと説いている<sup>12</sup>。彼の忠告に従って、シューは『パリの秘密』を書いていくことになる。この「魂の医者」という考え方は、1836年に『公衆衛生、道徳、行政の面から見たパリ市の売春について』(*De la prostitution dans la ville de Paris, considérée sous le rapport de l'hygiène publique, de la morale et de l'administration*)という著作を出版した衛生学者アレクサンドル・パラン=デュシャトレ(Alexandre Parent-Duchâtelet)の態度と通底するものがある。パラン=デュシャトレは、パリの下水渠や畜肉解体処理場、モンフォーコンのし尿処理場など、腐臭の漂う場所、言わば都市社会の暗部を調査し、それをいかに衛生的に整備するかに精力を傾けた医者である。彼が、同じく公衆衛生の立場から、「社会の汚物」、「別種の下水渠<sup>13</sup>」とみなす娼婦を調査・研究してまとめたのが、上記の書物である。アラン・コルバン(Alain Corbin)がパランの業績を要約して、公衆衛生とは「都市を締め付ける、吐き気を催すような地帯に対する闘い」であり、パランは「臭気観察の専門家」として、「吐き気を催すものと民衆—ブルジョワにとって、それは同じものではなかろうか—の探究」を志したと述べている<sup>14</sup>。パランの企てた分析が、「社会という肉体のはらわたの中に降りていくこと」、「一種の探検、風変わりな旅の幕開けとなる深淵への下降」<sup>15</sup>を意味するのと同じ意味で、グーボーはシューに下層の民衆階級まで降りていくことを勧めているのだ。従って、『パリの秘密』の冒頭で、「語り手」が読者に、「監獄、徒刑場を占め、その血が処刑台を赤く染める、あの地獄の種族の土着民たちの間」を巡る「小旅行(excursion)」、または「探検・調査(investigation)」<sup>16</sup>を提案しているのも当然のことで、読

12 *Ibid.*

13 Alexandre Parent-Duchâtelet, *De la prostitution dans la ville de Paris, considérée sous le rapport de l'hygiène publique, de la morale et de l'administration*, J.-B. Ballière, 1837, t.I, p.7.

14 Alain Corbin, Présentation à son édition Parent-Duchâtelet, *La prostitution à Paris au XIX<sup>e</sup> siècle*, Seuil, 1981, p.22.

15 *Ibid.*, p.13.

者は、主人公のロドルフ (Rodolphe) と共に社会の深淵に降りていくことになる。その深淵の住民としては、男の場合は強盗、殺人者などの犯罪者、女の場合は下級娼婦という姿でしばしば立ち現れる。本稿では、『パリの秘密』に登場する娼婦 (または娼婦予備軍) について、シューがどのように描いているのかを検討していきたい。

娼婦像の分析にあたっては、パラン=デュシャトレの『公衆衛生、道徳、行政の面から見たパリ市の売春について』(以下、『パリ市の売春について』と略す) を参照しながら考察を進めていきたい。というのも、先に見たように、シューとパラン=デュシャトレの視点に共通項が見出せること、更に、『パリの秘密』のテキストに作者自身が付けた註の中に<sup>17</sup>、パランの書物が言及されているからだ。また、同じく『パリの秘密』の註には、アルフォンス・エスキロス (Alphonse Esquiros) とフレジエ (H.-A. Frégier) の名もあり<sup>18</sup>、労働者、貧困階級を調査、分析したこれら同時代の者の資料に基づいてシューが作品を執筆したことは、明らかである。とりわけフレジエは、その著『大都会の住民における危険な階級、及びその改善法について』(*Des classes dangereuses de la population dans les grandes villes, et des moyens de les rendre meilleures*) (1840) の結論部分で、民衆を徳に向かうよう啓発する役目を担うのは、もはや宗教ではなく新聞であると述べ、大衆における「健全な考えの普及」に手を貸すよう作家たちに呼びかけている<sup>19</sup>。ウージェーヌ・シューの新聞小説は、まさにその呼びかけに答えたものと言えよう。エスキロスも、1844年に再版された『狂える処女』(*Vierges folles*) - *Vierges martyres, Vierges sages* と三部作をなす著作で、娼婦を扱ったものの一の序文で、シューの『パリの秘密』に触れ、社会から疎外されて生きる「暗黒の階級」の苦しみを描くことを目指した自らの著作と、シューの作品を同列に

16 Eugène Sue, *Les Mystères de Paris*, Bouquins, Robert Laffont, 1989, p.32. 今後、『パリの秘密』からの引用は、この édition のもので、本文テキストの引用の後に頁数のみを記す。

17 *Les Mystères de Paris*, p.88, note 1.

18 エスキロスは p.1091, note 1で、フレジエは p.1236, note 2で言及されている。

19 Frégier, *Des classes dangereuses de la population dans les grandes villes, et des moyens de les rendre meilleures*, J.-B. Baillièrre, 1840, t.II, pp. 506-507.

並べて論じている<sup>20</sup>。従って、パラン=デュシャトレに加えて、フレジエの上記の著（以下、『危険な階級について』と略す）、及びエスキロスの『狂える処女』（1840）をも考慮に入れて、シューの作品における娼婦像を考察していきたい。

## I

パラン=デュシャトレは、『パリ市の売春について』の冒頭で、彼が取り扱う「娼婦」の定義づけを行っている。「娼婦」とは、「社会から離れ、社会と縁を切ったおぞましい状態」に陥った階級、「大胆にも、常に公衆の面前でなされる破廉恥な習慣によって、社会と社会を律する共通の規範を放棄すると宣言」した者で、行政当局が細心の注意を払って監視しなければならない対象とみなしている<sup>21</sup>。そして、彼はこうした存在を「*prostituées*」または「*filles publiques*」と呼んでいる。彼の言う「娼婦」とは、具体的に言えば、警視庁の風俗取締局（Bureau des mœurs）に登録して、当局の監視を受ける「登録娼婦（*filles inscrites*）」を指している。パランは、それ以外の者として「*femmes galantes*」[「*femmes entretenues*」（妾）もこの部類に入る。特定のパトロンに囲われ、贅沢な生活を送っている女。上品な身のこなし、優雅な服装をして上流階級風の誘惑のテクニックに長けている]、「*femmes à parties*」[美貌だけではなく気品と高い教養に裏打ちされた魅力の持ち主で、彼女たちに近づくには、常連客の紹介が必要である。しばしば夜会、晩餐会—そこで賭博も行われる—を催す]、「*femmes de spectacles et de théâtres*」[女優]などを挙げている。こうした女たちは、財産や健康を失わせる最も危険な存在とみなされているが、行政的には「娼婦」の範疇に入らない。何故なら、彼女たちには持ち家があり、税金を支払い、一応、社会の規則にも従っているからで、一般市民同様、社会的権利を享受できる立場にある。それに対して、「登録娼婦」は法律の外に置かれた存在で、パランはこの

20 Alphonse Esquiros, *Vierges folles*, E. Dentu, 1873, p.8.

21 Parent-Duchâtelet, *op.cit.*, t. I, p.27.



種の女たちを「真の娼婦 (véritables prostituées)」と呼んでいる<sup>22</sup>。

次にパランは、この「真の娼婦」を、行政的見地から大きく二つのカテゴリーに分け、更に細分化している。それをまとめると、次のようなものとなる<sup>23</sup>。

1. 「公認の娼家に閉じ込められ、女将の指導と監視のもとで、女将に従属する女たち」

娼家（「認可の家 (maison de tolérance)」とも呼ばれ、開業するには警視総監の認可が必要)に属する女たちは、整理番号しかついていないため、「番号付きの女 (filles en numéro)」と呼ばれている。一旦娼家に入ると、食事、衣装、装身具など全て女将 (maîtresse または dame de maison と呼ばれている) から支給されるが、報酬は一切もらえない [こうした女将への従属関係をパランは、「娼婦の隷属」というタイトルで、一章を費やして論じている]。

2. 「自由に自分の好きなように行動でき、行政局と衛生局にのみ活動報告をすればいい女たち」

(1) 自分の部屋があり、自分の家具を所有している娼婦

部屋の家賃を払い、衣装も自前で、稼ぎは自由に使える。ただし、娼家の一室を借りることが多く、女将から家賃を高くつり上げられるなど搾取されることがしばしばある。

(2) ガルニ (安い料金で貸す、家具付きの部屋)、屋根裏部屋などに住んでいる娼婦

2. のカテゴリーの娼婦は、1. の娼婦のように、娼家の女将の監視は受けないが、1ヶ月に2度、性病検査のために医者への検診を受けねばならず、診察結果を記すためのカードを交付されている。そのため、「カード付きの女 (filles en cartes)」と呼ばれている。

パラン＝デュシャトレは、売春を必要悪とみなし、娼婦のこうした分類は、行政にとって秩序と規則の遵守のために必要不可欠のものであるとしている。

22 *Ibid.*, pp. 174-177.

23 *Ibid.*, p.178. 更に、娼婦の区分に言及している他の箇所も参照した。

それに対して、エスキロスは、より人道的な博愛主義の立場に立って、「近代の奴隷制度の特徴」というタイトルのもと、次のように娼婦を区分している<sup>24</sup>。

### 1. 「不服従の女 (filles insoumises)」

娼家に属することもなく、登録もせずに客を取る最底辺の娼婦。物乞いや屑屋、大道芸人などが住む一画の汚いガルニに住んでいる。夜闇に紛れて通りに立つか、安酒場などで客引きをするが、10代の少女であることが多い。また、「石切り場の女 (pierreuses)」と呼ばれる女は、住む場所もない醜く年老いた娼婦で、石切り場付近に現れ、最下層の男を相手にする。「バリエールの女 (filles de barrières)」は、市壁 (バリエール) の安酒場に出没する娼婦で、「文明の埒外にある」存在と規定されている。

### 2. 「登録娼婦 (filles inscrites)」

- (1) 「娼家の女 (filles de maison)」：女将の圧制のもと、「魂と肉体の隷属状態」にある娼婦 [エスキロスは、娼婦たちの、女将に対する隷属を詳細にわたって記述している。]
- (2) 「番号付きの娼婦 (filles en numéro)」：娼家で家賃を払って部屋を借りている娼婦。「娼家の女」ほどは、女将の束縛を受けないが、家賃など高く請求されて、なかなか自由になれない。
- (3) 「一人暮らしの娼婦 (filles isolées)」：①窓辺や戸口、通りなどで公然と挑発する者 ②挑発行為は行わないが、客がどこに行けばいいのか居場所がわかっている娼婦という二つのランクに更に分かれる。②の娼婦の方が生活条件は良くなる。この範疇の娼婦は、自分の稼ぎを自由に処することができる、お金を貯めて、数年後には結婚する確率が高い。

エスキロスの分類は、基本的にはパラン＝デュシャトレと類似しているものの、幾つかの違いが見出せる。特に、娼婦の享受できる自由裁量の多寡を基準にしているところが、顕著な相違点と言える。即ち、エスキロスの階層区分では、最後のランクの娼婦に上がるにつれ、自由度が増し、「個としての確立 (individualité)」と「所有権 (propriété)」を獲得できると考えられているのだ。

24 Esquiros, *op.cit.*, pp. 149-196.

ウージェーヌ・シュールの『パリの秘密』に登場するラ・グアルーズ(*la Goualeuse*)や、サン＝ラザール監獄で彼女が会おうラ・ルーヴ(*la Louve*)を初めとする娼婦は全て、パラン＝デュシャトレが定義する「真の娼婦」のカテゴリーに当てはまる。ラ・ルーヴは、彼女自身が「私は自分の家具を備え付けた部屋に住んでいる (*Je suis dans mes meubles*)」(632)と述べているように、娼家に属さずに一人暮らしをしている比較的自由的な娼婦と言える。それ故、彼女は監獄から釈放されるとすぐ、何の拘束も受けずに恋人の元を訪れることができた。一方、ラ・グアルーズは、エスキロスの分類にある、最底辺の娼婦の部類に入る。その理由としてまず挙げられるのは、彼女の住んでいる場所が、強盗や殺人者、元徒刑囚の溜まり場である、シテのいかがわしい安酒場 (*tapis-franc*) であること。実際、フレジエが『危険な階級について』において、下級娼婦や犯罪者の密集する場所としてデ・ザルシ、サン＝トノレ界限と並んでシテの名を挙げている<sup>25</sup>。ただし、彼女は厳密な意味における娼家には属さないものの、「不服従の女」ではなく、酒場の女将に養われ、その監視・束縛を受ける最下層の「登録娼婦」である<sup>26</sup>。物語の中で彼女が最初に姿を現すのは、シテの泥にまみれた「薄暗く狭い、曲がりくねった迷路」(32)の一角、「洞窟のように奥深く、暗いアーチ形のポーチ」(33)の下である。この描写における「薄暗い」、「狭い」、「曲がりくねった」、「奥深い」といった形容詞はまさに、「社会という肉体のはらわた」の奥深くに下降していくイメージを読者に与え、その中心にラ・グアルーズが立っているのだ。また、ラ・グアルーズという名前は、下層階級の隠語で「歌姫 (*la Chanteuse*)」を意味し、「銀のような音色」(35)の彼女の魅惑的な声からつけられた綽名である。パラン＝デュシャトレの調査によれば、上層の娼婦は実際の女性の名を源氏名として名乗っているのに対し、下級娼婦は身体特徴の一部に由来す

25 Frésier, *op.cit.*, t.I, p.135. パラン＝デュシャトレもシテ地区を「娼婦が最も多くいる地区の一つ」(Parent-Duchâtelet, *op.cit.*, t.I, p.585)と述べている。

26 ラ・グアルーズは、ロドルフのおかげで娼婦の仕事につかなくてすむようになった後も、当時、娼婦の立ち入りが禁じられていたシャン＝ゼリゼ通りにいたために、娼婦を収容するサン＝ラザール監獄に監禁されてしまう。それは、彼女が「警察の登録の抹消を願い出ていなかった」(608-609)ため、彼女がそれまで「登録娼婦」であったことがわかる。

る名前がつけられることが多い<sup>27</sup>。従って、名前の点から見てもラ・グアールズが下級娼婦のカテゴリーに属していることがわかる。その上、エスキロスが最底辺の娼婦の年齢について指摘していたように、彼女は16歳というまだ10代の少女である。ラ・ペグリオット (la Pégriotte)、ラ・グアールズ、フルール・ド・マリー (Fleur de Marie) と様々な綽名で呼ばれていることも、その「流動性、不安定さ (mobilité)」を特徴とする下級娼婦の証であろう<sup>28</sup>。しかも、綽名はあっても本名はわからないという「名前の欠如」もまた、エスキロスによれば、「奴隷状態の最初の特徴<sup>29</sup>」である。というのも、「名前を持つためには存在していなければならない。ところが娼婦は、民法上は存在しないのだ<sup>30</sup>」。行政的観点から見れば、娼婦は法の保護を受ける権利を持たない、法的には無に等しい存在である。それはちょうど、アンセルム・デュレスネル (Anselme Duresnel) がブルジョワから徒刑囚、凶暴な殺人者に転落するや、社会的な名前を失って、メートル・デコル (Maître d'école) — 犯罪者たちの間では読み書きができ、教養があったため、「先生」という綽名がついた— という名でしか呼ばれなくなったのと同じである。一方、ドイツの小国ゲロルシュタイン (Gerolstein) の君主ロドルフは、労働者に変装して下層階級の中に潜入する時も、偽名を用いることはなく、一貫してロドルフと呼ばれている。名前の不変性という点でも、神の摂理の役割を果たす彼の超越的な立場が浮き彫りにされている。

このように、ラ・グアールズは本名を持たないばかりか、何も所有していない。酒場の女主人ポニス婆さん (la mère Ponisse) — いかかわしい安酒場やガルニの女将はオグレスと呼ばれ、物語の中ではポニスという固有名詞よりもむしろ、彼女はオグレスと呼ばれることが多い— に文字通り、彼女は隷

27 上層の娼婦は、Zulma, Modeste, Natalie, Olympe, Flore, Angéline などの名前を名乗っているが、下級娼婦は、Boulotte (ずんぐり女)、Poil-Ras (短髪)、Poil-Long (長髪)、Belle Cuisse (きれいな腿)、Grosse-Tête (大きな頭) など体の特徴を表す名で呼ばれている (Parent-Duchâtelet, *op.cit.*, t.I, pp.132-133)。

28 エスキロスは「一人暮らしの娼婦」と「娼家の女」を比べて、前者は、後者ほどはその名前が目まぐるしく変わることがないとして、階層が下がるにつれて源氏名が様々に変わると述べている (Esquiros, *op.cit.*, p.188)。

29 *Ibid.*, p.173.

30 *Ibid.*

属しているのだ。彼女は、ロドルフに向けて次のように言っている。

私が身につけている服はオグレスのものです。私の住まい（ガルニ）、私の食事代も彼女に負っているのです。私はここから動くことができません。[ここから逃げたら]彼女は私を泥棒として捕まえさせるでしょう。私は彼女の物なのです。(59)

ラ・グアールズが身にまとっているみすぼらしいドレスも、粗末な小さいショールも、珊瑚のネックレスもハンカチ一枚に至るまで全てオグレスのもので、唯一、彼女の物と言え、ひからびた小さなバラの木の枝しかない。このことを知ったロドルフは、「汚いあばら家、襤褸着に不潔きわまる食事のために、これほど恐ろしい隷属、これほどおぞましい肉体と魂の売却」（88）を強いられているのかと、ひどく驚いている。「オグレス (ogresse)」の本来の意味は「食人鬼」で、ラ・グアールズのような新鮮な肉体を食べ物にする酒場の女将に相応しい呼び名と言える。それはまさに、パラン＝デュシャトレやエスキロス、フレジエが指摘している娼婦の、娼家の女将に対する隷属状態である<sup>31</sup>。ラ・グアールズはオグレスにとって「人」ではなく「物」、エスキロスの言葉を借りれば、「人の形をした商品 (marchandise humaine)<sup>32</sup>」でしかない。

しかも、ラ・グアールズが娼婦となったのは、それまで彼女が送ってきた過酷な生活環境 [生みの親が誰であるかわからず、育ての親からひどい虐待

31 とりわけ、フレジエの次のような記述は、ラ・グアールズの置かれた状況を具体的に物語っている。「娼家の女はご承知のように、自分の服は一枚も持っていない。彼女たちは娼家に入る時に、着ている衣類一大抵いつも粗末で価値の殆どないものだが—を手放す習慣があったので、下着も靴下も靴も自分の物ではない。こうした赤貧状態を娼家の女将はこれまで助長し、それを唆しさえしてきた。その方が、はるかに容易に彼女たちを自分の意のままに従わせることができたからだ。こうした状態が、女将と娼婦との間の絶えざる争いの原因となる。実際、娼婦の中には、自分たちを虐げる女将と喧嘩して、娼家から姿を消す者もいた。彼女たちは自分の服がないために、身につけている衣類を持って行ってしまふ。この窃取は警察に告発され、罪を犯したとされる娼婦は警察に捕えられ、自分の物ではない衣類を返却するか、その窃取が窃盗罪の性格を持つ場合は、行政的な処罰を受けることになる」(Frégier, *op.cit.*, t.II, pp. 260-261)。

32 Esquiros, *op.cit.*, p.177.

を受けて成長する。そこから逃げ出すものの、「浮浪児 (vagabonde)」として感化院に8年間閉じ込められる。感化院を出た後も、出産を控えて困っている女性のために有り金を使い果たし、金に窮した彼女は、オグレスの手によって娼婦に身を落としてしまう<sup>33]</sup>によるもので、「彼女の悪い性向というよりもむしろ、貧困、放棄がこの哀れな娘を墮落させてしまった」(59)とシューは語っている。その上、このような状況は、彼女のみに当てはまる例外的な事例ではない。フレジエが『危険な階級について』の「浮浪児の生活慣習」の章で扱っているように、それは、当時の貧しい階級の子どもたちが恒常的に曝されている悲惨な環境の一例に過ぎない。フレジエはこの章の最後で、孤児や親に捨てられた子どもたちを取り上げ、「確かに、弱く経験のない年頃に、このような孤立・放棄の状態に置かれたならば、放浪、物乞い、窃盗でさえも、それがいかに嘆かわしいとはいえ、残酷な必然の法則による、やむを得ない結果ではなかろうか<sup>34]</sup>」と結論づけている。実際、この章で言及されている浮浪児の生活（住む場所のない子どもは、石切り場や石膏焼きの釜の上で寝る）は、『パリの秘密』に登場するシュリヌール (Chourineur) の生い立ちそのものである<sup>35]</sup>。物語の構造として、第一部第3章の「ラ・グアルーズの身の上話」と対照を成す形で、第4章「シュリヌールの身の上話」が展開されているのも、ラ・グアルーズとシュリヌールを、貧しい階級の少年少女それぞれが辿る人生の雛形として、読者に提示するためではなかったろうか。その上、ラ・グアルーズのように一旦娼婦になってしまうと、たとえ後悔しても無駄で、「泥沼」から自力では決して抜け出せない。こうした冷酷な社会の仕組みをシューは暴き出しているのだ。ロドルフのラ・グアルーズに向けた次のような言葉がそれを如実に物語っている。

33 感化院や施療院 (オピタル) などに入っている若い娘に好物のお菓子を差し入れ、お金を貸すなど、甘言を弄して若い娘を売春に引き入れる娼家の女将や「やり手ばばあ (proxénète)」については、パラシ＝デュシャトレやフレジエが詳細に言及している。

34 Frégier, *op.cit.*, t. I, p.200.

35 シュリヌールはラ・グアルーズが悲惨な幼年時代を送ったとはいえ、まだ屋根のついた寝る場所があっただけでも恵まれていると語り、彼は「ルーヴルの切り石、クリシーの石膏釜、モンルージュの石切り場が若い頃のねぐらだった」(61)と述べている。

一旦その深淵に落ち込んでしまうと、お前の後悔、恐怖と絶望にも拘わらず、お前がその犠牲者であるこの社会の残忍な無関心のせいで、お前にはもはやそこから抜け出すことはできなかつた。お前は永遠にこの巢窟に鎖で繋がれたままであつた。お前をそこから引き離すには、私がお前と出会うという偶然が必要であつた。  
(1281) [下線筆者]

従つて、彼女には罪はなく、彼女は社会の「犠牲者」に過ぎない<sup>36</sup>。ラ・グアルーズは、「住む家もパンもなく見捨てられ、軽蔑され、墮落させられた哀れな存在」(90)であるにも拘わらず、パリ近郊の野原で新鮮な空気を吸い、太陽の光を浴びることができただけで無邪気に喜び、神に感謝している。その様子を見て、ロドルフは感動のあまり涙ぐむのだ。彼の使命は、彼女やシュリヌールのように、劣悪な環境の中でも「良い心」と「名誉心」を失わずに持ち続けている者を救い出し、その徳に報いを与えること、「神の摂理の役割を少し果たす」(204)ことである<sup>37</sup>。性善説を信奉するシュールは<sup>38</sup>、悪は社会的要因によって生まれると考え、「無知と貧困がしばしば貧しい階級の者を、人間的にも社会的にも恐ろしい墮落に導いてしまう」(635)と語っている。彼は「魂の医者」として、悪そのものを「病氣」とみなし、次のような診断を下している。

恐らくいつかまた、社会は次のようなことを知るであろう。悪は偶発的な病氣であり、器質的なものではないことを。そして、犯罪は殆どいつも本能の破壊によって生じるということ。または本質的には常に良い性向が、統治者の無知、エゴ

36 彼女の過去を知ったラポルト司祭 (l'abbé Laporte) もまた、「あなたに咎があるというよりも、むしろ犠牲者である大きな過ち」(121)という言い方をして、彼女を売春という大罪を犯した「罪人」ではなく「犠牲者」とみなしている。

37 シュールはロドルフに次のようなセリフを言わせている。「善に報いを与え、悪を追求し、苦しんでいる者の苦しみを和らげ、人類のあらゆる傷を探り、幾つかの魂を破滅から救い出すこと、それが自分に課した任務だ」(1116)。ジャン＝ルイ・ボリによれば、ロドルフ (Rodolphe) は勇敢な騎士の名である < Rudolph > をフランス語化した名で、彼は「悪魔に対する十字軍」の騎士として、「怠惰な神」に代わって貧困や悪と戦っているのだ (Jean-Louis Bory, *op.cit.*, p.252)。

38 シュールは、本文テキストの中で次のように述べている。「全ての人間は多かれ少なかれ、心の内に美、善、正義への愛を持っているが、貧困、愚鈍がこうした天与の本能を歪め、押し殺すことで、人間の墮落の第一要因となっていると考えるべきではなかろうか」(1042)。

イズムや怠慢のせいで歪められ、呪いをかけられたために犯罪が生じるということ。魂の健康は、肉体の健康と同じく、健全で予防的な衛生の法則に必ず左右されるということ。 (958)

この観点から見れば、ラ・グアールズやラ・ルーヴ<sup>39</sup>のような娼婦も、社会の毒に蝕まれた「病気の子ども」(643)に過ぎない。

娼婦に対するシュエのこのような考え方は、それまでの一般的な考えとは大きく異なるものである。例えば、18世紀のレチフ・ド・ラ・ブルトンヌ (Rétif de la Bretonne) に、売春について論じた『ポルノグラフ』 (*Le Pornographe*<sup>40</sup>) (1769) という著作がある。その中でレチフは、「Parthénion」と彼が名づける娼館を開設し、そこに娼婦を隔離、監禁して厳格な規律と監視のもとに置くことを考えている。彼の売春論は、男の性的欲望を抑えることのできない生理的欲求と認めて、そのはけ口として娼婦の存在が不可欠だと考える男の視点に基づいたもので、娼婦の人権は全く考慮に入られていない<sup>41</sup>。レチフにとって娼婦は、良家の息子を誘惑し、墮落させる「不純な魂<sup>42</sup>」の持ち主、しかも梅毒を撒き散らし、「有益で頑丈な男にその腐敗を伝染し<sup>43</sup>」、健全な家庭を脅かす「悪の源<sup>44</sup>」でしかない。彼は娼婦を、あたかも遺伝的欠陥によって、生まれながらにして娼婦となるべく定められた存在とみなすか、または自らの不道德な行いの当然の報いとして娼婦となったと考えている。それ故、女の視点から、何故娼婦とならざるを得ないのか、その原因を深く

---

39 ラ・ルーヴの場合は、狭い部屋で腹違いの兄弟と一つのベッドを共にせざるを得ない貧しい家庭環境に育ち、それが彼女を娼婦の道に入らせたとしている。ラ・ルーヴは、フレジエが労働者に関する章で、家族が一つのベッドしか所有していないために、「早くから子どもたちの羞恥心を損なう」(*op.cit.*, t.I, p.87) 危険があると指摘した、その一例と言える。

40 レチフは、「pornographe」という語を「売春を論じる作家」という意味で使っている (Cf. Rétif de la Bretonne, *Le Pornographe*, Slatkine Reprints, Genève-Paris, 1988, p.32, note 2)。

41 例えば、レチフは「パルテニオン」において、娼婦をその年齢、美貌などでランクづけをし、それに応じて料金を定めるなど、娼婦を商品扱いしている。

42 Rétif de la Bretonne, *op.cit.*, p.38.

43 *Ibid.*, p.221.

44 *Ibid.*, p.36.



追求しようとはしていないのだ。それに対して、パラン＝デュシャトレは、娼婦になる原因として「怠惰」、「虚栄心」、「贅沢志向」という生来の性格を挙げると同時に、貧困、劣悪な家庭環境や失業など社会的要因を挙げている<sup>45</sup>。また、先に見たように、娼家における娼婦の隷属状態を指摘し、偏見に囚われずに娼婦の実態を把握しようと努めている。しかし、彼もまた、売春を必要悪とみなし、下水渠同様に、それをいかに無害化し、衛生的なものにするかに重きを置いている<sup>46</sup>。要するに彼は、行政・警察当局の監視の目がより行き届きやすくなるためにも、「認可の家」の増設を主張する規制主義者(réglementariste)の立場に立っているのだ。「認可(tolérance)」という言葉が示すように、売春を禁止すると社会的な弊害が大きいので、次善の策として、売春を「大目に見る(tolérer)」ことにして、その代わりに、厳しい規則によってそれをうまくコントロールしようと考えているのだ。フレジエも同様に、売春の必然性を認めた上で、「売春の歯止めとなることのできる規則に、それを従わせること<sup>47</sup>」が行政の肝要であると述べている。彼にとって貧しい労働者階級は、「あらゆる種類の犯罪者を生み出す苗床」であり、「危険な階級」を構成するものである<sup>48</sup>。「危険な階級」を調査、研究して改善策を見出し、その危険性を削ぐことが彼の目的で、娼婦も「危険な階級」として、その調査・分析の対象であった。確かにフレジエは、低賃金や失業に苦しみ、生きるために売春せざるを得ない女工など、下層階級が身を置く悲惨な生活条件に言及している。しかし、セーヌ県庁の局長としての立場上、彼もまたパラン同様、行政官の域を出ることはない。それに対して、エスキロスとは社会主義革命への理想を抱くロマン派の作家として行政当局に批判を浴びせ<sup>49</sup>、

45 Parent-Duchâtelet, *op.cit.*, t.I, pp.89-102.

46 パランは『パリ市の売春について』第2巻第23章「娼婦は必要であろうか」の中で、次のように述べている。「娼婦は、人口密集地域では、下水渠、ごみ捨て場、汚物溜めと同様に、避け難いものである。当局の行動指針は、娼婦と下水渠に対して同じものでなければならない。その義務は両者を監視し、可能な限りあらゆる手段を使ってそれらに固有の不都合なもの力を弱めること、そのためにも、[...]できるだけその存在を見えなくすることである。」(*Ibid.*, t.II, pp.526-527)

47 Frégier, *op.cit.*, t.I, p.153.

48 *Ibid.*, p.7.

49 エスキロスは例えば、娼婦の登録抹消に関する行政手続の困難さを指摘し、それ

必要悪として売春の存在を認めたパラン＝デュシャトレに異議を唱えている。即ち、彼にとって売春は、永遠に存続する悪ではなく、天然痘やペストのような疫病と同様に、いつかは消滅させることのできる「病気」なのだ<sup>50</sup>。更にエスキロスには、レチフを初めとしてパラン＝デュシャトレやフレジエなど、これまで売春を論じてきた者に全く欠けていた視点を見出すことができる。それは、男の責任問題についてである。エスキロスは、売春の原因としてまず、「貧困」と「無知」<sup>51</sup>を挙げた後で、次のように言っている。「しかしながら、売春の真の原因は、我々の見解によれば、貧困や無為、無知、就労不能や愛情でもない。それは男だ<sup>52</sup>。」彼は続けて、「買う男がいなければ、身を売る女もはやいなくなるだろう。殆ど全ての場合、悪を引き起こす要因、その張本人は男であった<sup>53</sup>」と断言している。

ウージェーヌ・シューは、パランやフレジエの娼婦に関する調査や統計を参照、援用し、登場人物の造型に役立てながらも、思想的には、売春を社会の病と捉え、その治療法を探ったエスキロスの立場に近い。実際、『パリの秘密』の中でシューは、当局が「この肉体と魂の売却を大目に見るばかりか、それをより危険でないものにするために、規制し、合法化し、保護すらしている」(636)とパランなどの規制主義者を弾劾している。確かに彼は、『パリの秘密』の連載を始めた当初は、「クーパーがあればどうまく描いた野蛮な未開の部族と同様に、文明の外にいる別種の野蛮人」(31)である下層階級を、上層階級に属する部外者として探訪し、その生態、風習を描こうとしていた。しかし、ルイ・シュヴァリエ (Louis Chevalier) が指摘しているように<sup>54</sup>、新聞小説の読者である民衆の「集合的意志」によって、「危険な階級に関する本」から「労働者階級に関する本」に次第に変容していく。シューは、ブルジョワとしての体制側の立場から、いつの間にか労働者階級の中に取り込まれ、「民

---

が娼婦の解放を妨げていると批判している (Esquiros, *op.cit.*, p.198)。

50 *Ibid.*, p.112.

51 *Ibid.*, p.114.

52 *Ibid.*, p.126.

53 *Ibid.*,

54 Louis Chevalier, *Classes laborieuses et classes dangereuses*, Plon 1958 / éditions Perrin, 2002, p.511.

衆の視線」を内面化していったと言える。それ故、娼婦に対しても、「危険な階級」として恐れ、監視・統制する立場にはなく、娼婦をその悲惨な境遇から救い出し、人間としての自由を取り戻させる解放者の役目を担うようになる。物語の中でその役割を演じるのが、主人公のロドルフである。

ロドルフは、ラ・グアルーズをオグレスの元から救い出した後、ジョルジュ夫人 (Mme Georges) が営むブクヴァル (Bouqueval) の農場に彼女を連れて行く。そこで彼がまず行ったのは、オグレスから借りていた「胸のむかくような服」(106) から農婦の服装に彼女を着替えさせることであった。次に彼は、フルール・ド・マリーやラ・グアルーズといった綽名の代わりに、「慈悲深い神の使い」(107) として、彼女にマリー (Marie) という名前を授ける。後に、自らが代父となり、ジョルジュ夫人を代母にしてマリーに洗礼を受けさせようとしているように、彼女を「物」扱いの娼婦から、一個の人間に生まれ変わらせているのだ<sup>55</sup>。更に彼は、彼女に読み書きを習得させ、宗教教育を施している。こうした教育を受けることでマリーは、自然のままに生きる「無知」の状態から、善悪の区別のできる開明状態へと進化していく。それは、エスキロスが指摘していた「貧困」と「無知」からの脱却である。しかし、それと同時に、彼女は自分の過去を恥じ、激しい後悔の念に苛まれるようになる。彼女はラポルト司祭に、自分の胸中を明かしている。

ロドルフさまが私をシテから連れ出してくれた時、もう既に、自分が墮落しているような気が何となくしておりました。しかし、ジョルジュ夫人や神父様から受けた教育、忠告やお手本のおかげで、突然、私の知性の光がともったせいで、ああ、自分が不幸な女である以上にもっと、罪深い女であったということがわからなかったとでもお思いでしょうか。(317)

更にマリーは、絶望と悲しみに沈みながら、次のような言葉を吐いている。

神父様やジョルジュ夫人が、私に美德を理解させて下さったことによって、あな

55 ラ・グアルーズ自身、ロドルフに向かって次のように言っている。「私の新しい人生は、あなたが私に憐れみを抱き、農場に送ってくださった日から始まりました。」(1178)

た方は同様に、私の汚辱に満ちた過去の深さをも理解させてくれたのです。私がこれから何をしようと、私がこの世で最も卑しい人間の屑であったことには違いないのです。ああ！善悪を知ることが私にこれほど不幸をもたらすことになったのですから、私の不幸な運命に残されたものなど何もないのではないのでしょうか！  
(319)

教育によって、確かに「彼女の精神は高められ、知性は発達し、気高い本能が目覚めた」(320-321)。しかし、そのために彼女は「原初の墮落」を自覚し、過去の人生に「苦痛に満ちた、癒し難い恐怖」(321)を覚え、自分の未来を絶望するようになったと言う。それに対して司祭は、こうした悔恨は苦痛に満ちたものではあるが、魂の救済のために必要だと説く。彼女にはこの世では、「涙、後悔、贖罪」の道しかもはや残されていないが、あの世では「赦しと永遠の至福」(320)、「改悛の栄光」(321)が待っていると慰めている。マリーと司祭との間で交わされるこうした問答は、伝統的なキリスト教の教えに沿ったものである。シューは、娼婦が名誉回復(réhabilitation)の道を進むためには、自分の過去を「決して消し去ることのできない汚れ」(321)と認識して、心の底から改悛することから始めねばならないと説いている。シュリヌールに対しても同様で、自らの犯した罪を悔いて苦しむこと、「改悛の聖なる高揚」(183)を経て初めてその罪は贖われ、彼の「名誉回復はより気高く、より完全に、より英雄的になる」(184)<sup>56</sup>。シューが死刑廃止を主張するのも同じ理由に基づくもので、自分の過去を十分に悔いる間もなく罪人を死刑に処しても、犯罪の抑止にはならず、かえって社会に害を及ぼすと言うのだ<sup>57</sup>。シューにおいては、「後悔(remords)」、「改悛(repentir)」という

56 ロドルフは、シュリヌールに対してもマリー同様、Chourineur(「短刀突き」の意味)という綽名の代わりに、フランクール(Francœur:「率直な心」の意味)という名を与え、彼に適した職につかせ、読み書きを覚えるよう教育を施そうとしている。

57 シューは死刑廃止について、次のように主張している。「社会が殺人者を殺すのは、苦しめるためでも、「目には目を、歯には歯を」の法を課すためでもない。殺人者が害を及ぼすことができないように殺すのだ。彼の処罰が見せしめとなって、未来の殺人者たちに歯止めをかけるために殺すのだ。こうした処罰はあまりにも野蛮すぎるし、それほど恐怖に陥れるものではないように思える。親殺しや他の大罪にあたる犯罪においては、「盲目の刑」や独房に死ぬまで監禁することで、受刑者が害を及ぼすことを不可能にし、彼に改悛と贖罪の時間を与えることで、はるかに恐ろしいやり方で処罰

語がキーワードとなり、同じ罪人でもラ・シュエット (la Chouette) やマルシャル(Martial)一家のように改悛とは無縁の者は、「賤民(populace)」(1236)として「民衆 (peuple)」と峻別されている。前者は懲罰の対象となって、非業の最期を遂げる運命にあるのだ。

このように、たとえ娼婦ラ・グアルーズから農婦マリーに生まれ変わったとしても、過去が帳消しになるわけではなく、彼女の過去は「決して消し去ることのできない汚れ」として残る。ラポルト司祭が彼女の結婚の可能性を否定しているように、シューの世界では、真の意味での娼婦の社会復帰は許されない。ブクヴァル農場というフーリエ主義に基づいた、労働者のユートピア的な共同社会からも、ラ・グアルーズは追放されてしまうのだ<sup>58</sup>。確かに彼女は、ロドルフによって奴隷状態から解放され、教育を受けることで、自分の運命を消極的に受け入れるのではなく、積極的に働きかけるようになる。その証拠に、サン＝ラザール監獄で彼女は、他の娼婦たちに多大な影響を与え、彼女たちを善導する力を持つにいたっている<sup>59</sup>。その意味では、彼女は個としての確立を成し遂げたと言える。しかし、彼女の力を十二分に発揮できるのは、あくまでも娼婦の間でしかない。ロドルフから実の娘として認知され、社会的名誉を完全に回復して、アメリー皇女 (Princesse Amélie) という高貴な名に変わっても、この世には彼女の居場所はない。アンリ公 (Prince Henri) との結婚を断念して、贖罪のために修道院に入り、18歳の若さで聖女として死ぬよう運命づけられているのだ。こうした結末は、一つには、当時の読者の「集合的意志」によるものであろう<sup>60</sup>。また、シュー自身がブルジョ

することができる」と我々は信じている」(1229)。

58 正確に言えば、ブクヴァルの農場ではないものの、近くの農場で、マリーの過去を知る牛乳売りの農婦に彼女の過去を暴露され、彼女は農民たちから罵倒された上、危うく川で溺れ死にさせられそうになる。

59 第5部第8章で、彼女は次のように描かれている。「かつて、あれほど消極的に、あれほど痛々しく諦めきっていたフルール・ド・マリーが、勇敢に、威厳を持って語るのを聞き、行動しているのを見て驚かされただろうが、それは、彼女がブクヴァル農場に滞在していた間に受けた気高い教育によって、その優れた本性の稀有な素質がたちまち花開いたためである」(627)。

60 シューに寄せられたファンレターの中で、例えば Louis Jaquet という人物は、1843年2月15日付の手紙の中でフルール・ド・マリーの行く末に関して、作者に次のような提案をしている。「二つの方策があります。即ち、彼女を聖女として死なせること。

ワとして、その道徳観に縛られていたとも考えられる。シューは、ラ・グアルーズのような娼婦を社会の犠牲者とみなし、共感と同情を抱いて彼女を救い出し、その更正に手を貸そうとしている。しかし、その一方で、ラ・ルーヴのように同じ階級の男との結婚は認められるとしても、娼婦が上の階級の男と結婚して幸福になることは断じて許されない。ちょうど、パラン＝デュシャトレが、ブルジョワや更に身分の高い階級の者が娼婦と結婚することに眉を顰め、「自分の家族の中に、恐らくは憐憫に値するだろうが、その名前を名乗るには決して相応しくない娼婦を入れることに顔を赤らめない者<sup>61</sup>」を非難しているのと同じ立場に立っているのだ。従って、たとえラ・グアルーズがドイツの王国の君主の実の娘だとわかって、おとぎ話のような幸せな結末を迎えることはない。彼女の悲劇的な最期には、ブルジョワ社会の内部に娼婦が入りこんでくることを恐れるシューの潜在的な危惧が反映されているように思える。このように、ラ・グアルーズには、作者自身の娼婦に対する両面的な感情が投影されていると言えよう。

以上のように、シューの作品には、ラ・グアルーズやラ・ルーヴのような娼婦が登場するが、その他にも娼婦予備軍と呼ぶことのできる女性が何人か描かれている。次章では、そうした女性について見ていきたい。

## II

『パリの秘密』には、ラ・グアルーズと同じ年頃で、彼女と対をなすリゴレット (Rigolotte) という娘が登場する。リゴレットは両親を幼くして亡くし、育ての親もペストで失って誰も引き取り手がなかったために、ラ・グアルーズと同じ感化院に入れられた、似たような境遇の娘であった。ラ・グア

---

それは皆の考える方法で、従って誰も満足させられません。または、その厳かな父親—彼女は彼を慰める天使となるわけですが—の庇護の下に、残りの人生を貧しい孤児のための大きな施設の指導に捧げさせることです[...]。」(Jean-Pierre Galvan, *op.cit.*, t.1, p.109) または、V.G. と署名された日付不詳(編者のGalvanは、1843年8月18日のシューの連載記事の後に書かれたと推定している)の手紙では、ラ・グアルーズを「贖罪のために修道院に入れて下さい」(*Ibid.*, t.2, p.321) とある。

61 Parent-Duchâtelet, *op.cit.*, t. II, p.21.

ルーズと共に感化院を出た後、彼女は自宅で仕立ての仕事を請け負うお針子となる。作者自身がリゴレットを何度もグリゼットと呼んでいるように、彼女はグリゼットの典型として描かれている。グリゼット (grisette) という語は、16世紀において灰色 (gris) のラシャ布を指していたのが、次第に換喩として「グリゼットを着た娘」を意味するようになった<sup>62</sup>。17世紀後半からグリゼットは、この安物の粗末な布しか身にまとえない下層階級の娘を指すようになる。文学作品で初めてグリゼットが登場するのは、ラ・フォンテーヌ (Jean de La Fontaine) の物語 (1665) の中で、美しくコケットな貧しい庶民の娘として、「シニクな快活さ<sup>63</sup>」と多少の軽蔑を込めた男の視点から描かれている。グリゼットは18世紀にいたるまで、「狩りの他の獲物と同様に<sup>64</sup>」、領主が追いかける獲物、貴族の手頃な遊び相手であった。19世紀においても同様で、例えば19世紀ラルース大辞典では「身分の低い階級のコケットな若い娘」と定義され、とりわけ、「色好みの女工 (ouvrière galante)」を指すとある。リトレ辞典でも「特に、職業を持った若い娘、お針子、刺繍工などで、若者の口説きになびきやすい娘」という説明がなされている。19世紀においてこうしたグリゼットを扱った作品は、アルフレッド・ド・ミュッセ (Alfred de Musset) の『ミミ・パンソン嬢』 (*Mademoiselle Mimi Pinson*) や、プッチーニ (Giacomo Puccini) のオペラ『ラ・ボエーム』 (*La Bohème*) の原作となるアンリ・ミュルジェール (Henry Murger) の『ボヘミアン生活情景』 (*Scènes de la vie de bohème*)、または当時流行していた生理学ものの一つで、グリゼットの生態を軽い筆致で描いたルイ・ユアール (Louis Huart) の『グリゼットの生理学』 (*Physiologie de la grisette*) など枚挙にいとまがない。アリーヌ・アルキエ (Aline Alquier) によれば、「真の」グリゼットが君臨した時期は、1820年代から40年代にかけての短い期間でしかないが<sup>65</sup>、その間にグリゼット神話が生み出され、ロマン主義世代の作家の作品の中で

62 グリゼットの言葉の変遷に関しては、Aline Alquier, « La Grisette au XIXe siècle. Une sorte de précurseur », in *Les Amis de George Sand*, Nouvelle Série N° 12, 1991 を参照した。

63 *Ibid.*, p.4.

64 *Ibid.*

65 *Ibid.*, p.6.

語り継がれることになる。ミュルジュールは、1846年に出版した上記の作品の中で、次のようにグリゼットの消滅を嘆いている。

これらのきれいな娘たちは、半ば蜂、半ば蟬の暮らしをし、週日はずっと歌を口ずさみながら働き、神様には日曜にほんの少しの太陽しか望まず、喜んで卑俗な愛を交わし、時には窓から身を投げることもあった。今の若者世代のせいで、今や消滅してしまった人種。[...] 意地の悪い逆説を作り出す快樂のために、彼らはこれら哀れな娘たちを、労働の聖なる傷跡によって台無しになった彼女たちの手を話題にしてからかった [...]。少しずつ彼らは、彼らの虚栄心、その愚かさを彼女たちに植え付けていった。その時、グリゼットは消滅したのだ。そして、ロレット<sup>66</sup>が誕生した<sup>67</sup>。

上の引用にあるように、グリゼットは働き者のお針子で、貧しいながらもその生活に満足している陽気で快活な若い娘のことである。ジュール・ジャン (Jules Janin) の言葉を借りれば<sup>68</sup>、グリゼットは「恋人のいない詩人、雄弁家の卵、剣のない将軍、演壇のないミラボーに微笑みかける無償の愛」であり、「親から乏しい仕送りを受け、将来有望の、パリに住む全ての若者がヴィヴィエンヌ通りのこの可愛い侯爵夫人たちの征服者にして暴君になれる権利を持っている」。しかし、二人の幸せな同棲生活は束の間に過ぎず、恋人は医者や弁護士などの職業に就くや、彼女を捨てて去ってしまう運命にあった。要するに、グリゼットはお洒落でコケットな娘で、恋人を何人も持つことがあるが、金銭づくの女ではない。彼女と同じくらい貧しい学生に無償の愛を捧げ、献身的に尽くす女性である。彼女が働くのをやめて、贅沢な生活を求めて金持ちのパトロンに囲われるようになると、グリゼットからロレットに変貌してしまうのだ。

こうした多くの作家が挙げるグリゼットの幾つの特徴を、シューの描く

66 ロレット (lorette) は、1840年頃、モンマルトルのノートル・ダム・ド・ロレット (Notre-Dame-de-Lorette) 教会の周辺に大勢の娼婦たちが住みついたため、彼女たちに付けられた呼び名である。

67 Henry Murger, *Scènes de la vie de bohème*, Folio, Gallimard, 1988, p.311.

68 Jules Janin, « La Grisette », in *Les Français peints par eux-mêmes*, L. Cumer, 1840, t.1, p.12.



リゴレットの中にも見出すことができる。第一に、「*rigoler*」(笑う、楽しむ)；「*rigolo, rigolote*」(おかしな、滑稽な)といった語を彷彿とさせる「*Rigolette*」という名の通り、彼女はすぐに笑い興じるその陽気さ、快活さで特徴づけられる。そして、ユアールが『グリゼットの生理学』の中で、16歳からせいぜい30歳までと年齢を限定して、若さをグリゼットの第一条件にしているように<sup>69</sup>、リゴレットは「はちきれんばかりの瑞々しさ」(457)に輝く18歳の娘である。その小さな鼻は「つんと上がり、いたずらっぽく」(458)、薔薇色の唇と真っ白な歯並びの大きめの口は「よく笑い、冗談好き」(*Ibid.*)で、コルセットを必要としないほど細くすらりとした体つきだが、「とても官能的な丸みを帯びた」(457)腰、「波を打つように揺れ動く雌猫の仕草」(458)を思い起こさせる、肩や胸のなめらかさ、歩道の上をすべるように歩く「敏捷で、気を引くと同時にやや怯えた、グリゼット特有の歩き方」(457)が強調されている。このように、リゴレットは澁刺とした若さと、無邪気な色っぽさに溢れている。それに対して、ラ・グアルーズの方は、「最も純粹で、最も白い額」、「完璧な卵形の顔」、「素晴らしく甘美な輪郭」をなす小さな口と鼻、「輝かんばかりに白く美しい」(40)首などに象徴される純潔な白さと、「生まれ持った気品と優雅さ」(300)がその特色である。「聖処女(*sainte Vierge*)」を意味するフルール・ド・マリーの綽名の如く、「清らかな乙女の顔つき(*figure de vierge*)」(608)、「天使のような存在(*créature angélique*)」(1159)と、彼女の美しさは地上のものと言うよりは、セクシュアリテを持たない天上の世界に属している。シューは、ラ・グアルーズとリゴレットを次のように対比して描いている。

一方は金髪で、憂愁を帯びた大きな青い眼、天使のように完全な純潔を表す顔、グアルーズの描くあの愛すべき農婦のような、少し蒼ざめ、少し悲しみに沈んだ、少し靈化した顔、[...] 夢想と天真爛漫さと優雅さのえも言われぬ混合...

他方は、刺激的な褐色の髪に、丸くて血色のいい頬、きれいな黒い眼、無邪気な笑い、澁刺とした顔つき、若さと無頓着さと陽気さに輝く魅惑の典型、貧困の中の幸福、見捨てられた状態での正直さ、労働の中の喜びという感動的で稀な例。(833)

69 Louis Huart, *Physiologie de la grisette*, Aubert et C<sup>ie</sup>, 1841, p.12.

このように、リゴレットは、「将来に対する暗い、絶え間のない不安」に苛まれるラ・グアルーズとは対照的に、「楽しげな無頓着さ (insouciance)」、<sup>70</sup>「極めて大胆な先見の明のなさ (imprévoyance)」(456)をその特徴としている。彼女の将来に対するこの「無頓着さ」は、他の作家の描くグリゼット全般に共通するものである。例えば、ミュルジュールの作品に登場するミュゼット (Musette) の生き様は、「若さの花咲く小道での、無頓着で気紛れな散歩<sup>70</sup>」に喩えられ、『グリゼットの生理学』においては、「無頓着で無欲の愛すべき娘は、決して将来のことなど考えることがない<sup>71</sup>」とある。リゴレットの日課もグリゼットの典型として、週日は朝から晩まで仕事に費やされ、日曜には同じ下宿の青年をお供にして、シャルトルーズやコリゼの舞踏場でのダンス、タンブル大通りの居酒屋での夕食、ゲテ座やアンビギュ座の芝居を楽しんでいる。月曜には次の日曜を楽しみに再び仕事を始めるという具合で、言わば、一週間単位の、その日暮らしの生活を送っている。「リゴレットの予算」と題する章の中で、リゴレット自身がロドルフに、自分の収支決算の内訳を詳細に解説している。仕立の賃金は一日30スー<sup>72</sup>で、1ヶ月で45フランの収入になる。そのうち、家賃12フラン、食費23フラン (殆ど肉なしのパンと野菜または果物、牛乳の質素な食事)、冬の暖房用の薪とランプの油代が年に80フラン (月平均6,7フラン)、残りのお金が服飾代 (タンブルの古着市で安く手に入れる) に充てられている。ロドルフは、これほど少ない予算で、清潔な部屋と洒落た身なりを整えることのできる彼女の才覚に驚いている。この慎ましい生活は、当時のグリゼットの生活をそのまま反映したもので、例えば、エルネスト・デプレーズ (Ernest Desprez) は、「パリのグリゼット」と題する記事の中で、同じくグリゼットの賃金を一日30スーと見積もり、収支決算表を作成している<sup>73</sup>。その計算では、生活費の方が収入をはるかに上回り、赤字

70 Henry Murger, *op.cit.*, p.121.

71 Louis Huart, *op.cit.*, p.15.

72 1スー (sou) は、5サンチーム硬貨を指す。鹿島茂 (『馬車が買いたい! - 19世紀パリ・イマジネール』、白水社、1990年)によれば、この当時の1フランは、現在の日本円にして1000円相当なので、リゴレットの場合、1500円の日当ということになる。

73 Ernest Desprez, « Les grisettes à Paris » dans *Le Livre des Cent-et-un*, *Ladvoat*, 1832, t.6, p.214. デプレーズによれば、グリゼットの年収が547,50フランに対

の補填をするために、「政略的な男友達 (ami de raison)」と呼ばれるパトロンが存在が必要になっている。リゴレットの場合も、借金はないものの、貯蓄に回す余裕は殆どない状態で、ロドルフが彼女の将来のこと、病気になった場合を心配するのも当然である。彼女はそれに対して、自分は寒さに苦しむこともない、一日中働き、ヒバリのように陽気に歌い、マーモットのようぐっすり眠る。心は自由で楽しく、満足している。決して仕事なくなるなどないと確信しているのに、どうして自分が病気になるなどと考えるのだ、と彼に反論している。ロドルフは、彼女の「将来に対するこの盲目的で楽観的な信頼」(471)に心を打たれると同時に、「一ヶ月病気になると、この陽気で平和な生活が壊される可能性がある」(Ibid.)と恐れているのだ。

シュールは、ミュルジュールを初めとする上記の作家たちと同様に<sup>74</sup>、こうしたグリゼットの無頓着さ、屈託のない生き方を、「陽気で瑞々しく、生き生きとした若さ」を象徴する一篇の「詩」(460)として謳いあげている。しかし、その一方で、グリゼットの行く末を心配する現実の眼も兼ね備えている。実際、『危険な階級について』の女工に関する章で、フレジエは次のように記している。

[...] 親がいなくて、生きていくのに自分の僅かな稼ぎしかない女工は、一日25スーで、生活のための全ての必要経費をどうやって賄うことができるだろうか。これほど僅かな収入しかなくて、衣食住、一言で言えば、最も差し迫った欲求にさえ、どうやって応えることができるだろうか。そこに、多くの若い娘たちの貞節がぶつかる暗礁がある。それが、あれほど多くの難破を引き起こしているのだ<sup>75</sup>。

フレジエは別の章でも、「まさに不十分な賃金のせいで、多くの女工が、同棲や売春の中に収入の補足を求めるようになる<sup>76</sup>」と嘆いている。1日12時間

---

し、家賃が年に90フラン、食費247,50フラン、光熱費、服飾代など400フラン、ビールなどの嗜好品15フランで752,50フランの支出となり、205フランの赤字が出ている。

74 例えば、ミュルジュールは、「おお、魅惑的な娘よ！よく響く笑い声と陽気な歌を口ずさむ、若さの生きた詩よ！」とミュゼットを謳いあげている(Henry Murger, *op.cit.*, p.121)。

75 Frégier, *op.cit.*, t.I, p.97.

76 *Ibid.*, p.345.

の重労働を課せられながらも、男の労働者の半分、または3分の2しか収入のない女工の生活条件の中に、フレジエは「あらゆる弱者と同様に、女性に重くのしかかり、常にその実際の価値以下に貶める劣等意識」や「隷属」を見出している<sup>77</sup>。しかも、エスキロスによれば、「若さがこの窮乏と労働の生活を明るくしてくれる限りは、まだ半分の不幸 (demi-mal) でしかない<sup>78</sup>」。その後には「容赦ない老い<sup>79</sup>」が待ち受け、「ゆっくりと増大する不幸の連続<sup>80</sup>」の末に、物乞いまたは売春の道に転落し、最後は施療院か監獄で人生を終えることがしばしばである。リゴレットも病気や老いなどによって、こうした人生を辿る危険に曝されていたのだ。ロドルフ＝シューにとっては、責めるべきは社会の方であって、「娘の側からすれば、それは、もはや無頓着でも先見の明のなさでもなく、神の慈悲、その裁きが、勤勉で善良な存在を見捨てることはないという本能的な信頼」(471)によるものである。哀れな娘のたった一つの過ちと言え、若さと神から与えられた健康を当てにしていること (Ibid.) であった。それ故、ロドルフは神に代わってリゴレットの運命に介入し、彼女の美德の報奨として十分な持参金を与え、ジェルマン (Germain) との幸せな結婚を実現させるのだ。

ところで、リゴレットはジェルマンに出会うまで、誰の口説きにも応じたことがないという、グリゼットとしては「本当らしくない (invraisemblable)<sup>81</sup>」娘である。一般的なグリゼットには、恋人—前述のように、学生であることが多い—が不可欠で、それもまた、身の破滅の一因となる。それに関して、エスキロスは次のように述べている。

学生と愛情によって結ばれる若い娘たちの大半は、生まれつきの女工で、社会的地位の上昇を望んでいた。精神や心の優越は、彼女たちにとって致命的な贈物となり、彼女らを破滅に導いてしまう。彼女たちの中には、結婚の約束という偽りの餌に誘惑される者もいれば、労働者の妻よりむしろ、「立派な」男の愛人の

77 Ibid.

78 Esquiros, *op.cit.*, p.39.

79 Ibid., p.40.

80 Ibid.

81 Jean-Louis Bory, *op.cit.*, p.261.

方を好み、承知の上で身を任す者もいた。そこに、彼女たちの過ちがあった。[...] 彼女たちは、一つの幻影、一つの気紛れ、一つの思い違いのために、将来を犠牲にしてしまったのだ<sup>82</sup>。

『パリの秘密』の中でも、リゴレットがラ・グアールズに、感化院で一緒だったジュリー (Julie) とロジーヌ (Rosine) の消息を知らせる場面 (834) で、二人とも男に騙され、捨てられて、不幸に不幸を重ねてとうとう娼婦になってしまったと言っている。また、フレジエが言及しているように<sup>83</sup>、グリゼットに子どもが出来れば、子どもの養育費を稼ぐために身を売る羽目になることもある。それはまさに、ヴィクトル・ユゴー (Victor Hugo) の『レ・ミゼラブル』 (Les Misérables) に登場するコゼット (Cosette) の母親、ファンチーヌ (Fantine) が辿る運命である。

このように、若さに輝き、快活で無頓着に生きるグリゼット像は、言わば、男の側の身勝手なファンタスム、またはノスタルジー (功成り遂げた男が貧しかった学生時代を思い出し、彼を愛し、尽くしてくれたグリゼットとの屋根裏部屋での楽しい日々を懐かしむが、彼にとってグリゼットは、決して結婚の相手ではない<sup>84</sup>) によって作り上げられたものである。彼女たちの実態は、一つ歯車が狂えば身の破滅となりかねない危うい均衡のもとに生きていたのだ。シュールはロマン主義的なグリゼット「伝説<sup>85</sup>」に多分に影響を受けながらも、その一方で、現実生きるグリゼットの姿を捉え、彼女の直面する社会的な問題を浮き彫りにしている。それが、社会小説と呼ばれる所以であろう。

上で見てきたように、グリゼットは「真の娼婦」のカテゴリーには入らないが、娼婦予備軍として位置づけられる。また、リゴレットの「気分の変わりやすい (mobile)」、「思慮に欠けた (irréfléchie)」 (456) 性質、「無頓着さ」、

82 Esquiros, *op.cit.*, pp. 83-84.

83 Frégier, *op.cit.*, t.I, p.97.

84 エスキロス は次のように記している。「私は、今や上流社会の大立者となった男たちが、学生時代の楽しい年月、二人で笑い、苦しんだ屋根裏部屋、そしてとりわけ、愛してやまない人生のあのよき時代に彼らが愛した女を懐かしんでいるのを見てきた。」 (Esquiros, *op.cit.*, p.88)

85 *Ibid.*

「先見の明のなさ」は、パラン＝デュシャトレが娼婦の特徴として挙げる性質と重なり合う<sup>86</sup>。その意味でも、グリゼットはロレットの前段階と言えよう。更にシューは、リゴットの他にも「娼婦」の категорияに近い、別のタイプの女性を登場させている。それは、公証人ジャック・フェラン(Jacques Ferrand)の「色欲 (luxure)」の餌食となるルイーズ・モレル (Louise Morel) である。彼女は、主人と召使という社会的な従属関係、父親の借金といった弱みに付け込まれて、フェランに強姦され、情婦となり、妊娠した挙句、子殺しの罪まで着せられる女性である。ルイーズは世間の目には「墮落した女」と映り、非難の的となるが、ロドルフ＝シューは、「主人が召使女に対して、多少とも暴力的に強制した墮落」(525) とみなし、主人の欲求に恐怖のために応じる女性の立場を、「おぞましく野蛮な隷属状態」(*Ibid.*) と呼んでいる。その結果、こうした女の行き着く先は「殆どいつも墮落、貧困、売春、窃盗、時には子殺しなのだ！」(*Ibid.*) と述べ、金持ちによる貧しい階級の搾取、弱者としての女に対する男の搾取を暴き出している<sup>87</sup>。また、弁護士への費用が賄えないために、夫への「財産の分離・別居(*séparation de corps et de biens*)」—この当時、離婚は認められていなかったのも、これがほぼ離婚に当たる—の請求ができず、夫に虐待された上に、娘を娼婦として売るために夫に連れ去られた女の話が、一つのエピソードとして出てくる。当時の結婚制度では、上記の手続きをしない限り、夫は妻や娘を自由に処する法的権利を有していたのだ。シューは、こうしたエピソードを幾つか挿入することで、父権制に基づく結婚制度の問題点を突き、様々な形で女性が売春を強制される社会の

86 パラン＝デュシャトレは、娼婦の性質に関して次のように言っている。「娼婦を特徴づける軽薄さ (*légèreté*) や移り気 (*mobilité de l'esprit*) は理解し難いものである。[...] これらの女たちの先見の明のなさ、明日のことを思って不安になることも殆どなく、自分たちの将来に全く無関心であるように見えるのは、こうした精神のありようによって説明がつくのではなからうか」(Parent-Duchâtelet, *op.cit.*, t.I, p.116)。

87 シューは資本家階級によるプロレタリア階級の搾取を暴いているが、その一方で、プロレタリア階級に社会への反抗、社会の転覆を勧めてはいない。「金持ちの財産を損ねることなく、職工の幸福を保証できるような正直で知的で、公平な組織」(822) を設立することを夢み、「2つの階級を愛情と感謝の絆で結びつける」(*Ibid.*) 温情主義 (*paternalisme*) の立場に立っている。それが、マルクスに「空想的」と批判される所以である。

仕組みを批判している。ただし、それはジョルジュ・サンドが『アンディアナ』(Indiana)の中で行なった、結婚制度そのものに対する異議申し立てとは少し異なる<sup>88</sup>。シューは、社会的に抑圧された女性たちに直接、社会への反抗のディスクールを与える代わりに、メロドラマ的主人公として、「全能の」ロドルフを登場させている。ロドルフは、こうした社会悪を正し、ルイーズや他の女性たちを苦境から救い出す役目を一手に握っているのだ。このように、シューの物語に登場する娼婦は全て<sup>89</sup>、貧困や劣悪な家庭環境など社会的要因で「墮落」させられた存在、都市文明の犠牲者として描かれている。『パリの秘密』は、その様々なパターンを読者に見せる一種の展示場と言えよう。

\*  
\* \*

以上のように、ウージェーヌ・シューは、パラン＝デュシャトレやフレジエ、エスキロスなどが調査・研究してまとめた資料に基づいて、様々な娼婦を作り出している。しかし、ジャン＝ルイ・ボリが指摘しているように、シューのパリは、7月王政期の労働者階級を描いた物語の単なる背景に留まらず、「地獄」として「神話の威厳<sup>90</sup>」にまで達した不気味な存在でもある。彼の描く世界は、「ドキュメンタリー」であると同時に「神話」でもあるのだ<sup>91</sup>。娼婦に関しても、とりわけ、ラ・グアルーズことフルール・ド・マリーは、当時の最下層の娼婦を表していると同時に、神話的表象でもある。というのも、II章でリゴレットと彼女を比較対照して見たように、彼女はその名前の如く、セクシュアリテを持たない清らかさ、その無垢性が強調されているからであ

88 ジョルジュ・サンドについては、拙論「もう一人の椿姫—ジョルジュ・サンドの『イジドラ』—」(大阪女子大学女性学研究センター『女性学研究』第11号2004年)参照のこと。

89 クレオール (créole) のセシリー (Cecily) だけが例外で、「豹のように滑らかで遅しい」、「熱帯の炎にしか燃え上がらない獣のような官能の化身」、「魅惑的な吸血鬼」(933)、「古代ローマの女王として君臨した高級娼婦に相応しい退廃」の象徴、「悪魔的な悪意」(934)などと形容され、生れついでに娼婦とみなされている。しかし、それはヨーロッパ人男性が、クレオール (植民地生まれの白人女性、または混血女性) に抱く一種の幻想が反映されているように思える。

90 Jean-Louis Bory, *op.cit.*, p.265.

91 *Ibid.*, p.269.

る。彼女は何度も繰り返して「聖処女」、「マグダラのマリア」、「天使」に喩えられ、「彼女の優雅さと穏やかさは、彼女に近づく者全てに、言い難い力を及ぼすことができる」(1159)。それは、上記の社会調査、統計の枠から全く外れた娼婦像である。ロドルフ自身が述べているように<sup>92</sup>、マリーは、彼が父親に対して行った冒流行為への神の罰として、父の罪を背負って苦難に満ちた贖罪の道を進むよう宿命づけられていた。それは、ロドルフが父親に剣を向けた運命の日、1月13日に、「聖女」として死ぬことによって明らかである。マリー (Marieは「聖母マリア」をも意味する) は父の贖罪のために、最底辺の娼婦となって、運命の過酷な迫害に耐える必要があったのだ。彼女は、「肉体は汚されても、(心は) 墮落せず、恐ろしい墮落の真っ只中でも純潔なまま」(1120) である。ちょうど、娼婦 (fille publique) の肉体が、全ての男の物であると同時に誰のものでもないのと同様に、彼女は、もはや地上の愛の到達し得ない「聖処女 (Vierge)」の化身となっている。

このように、ロドルフは神に匹敵する全能の力を持っているにも拘わらず、その罪は娘のマリーによって贖われ、彼女によって魂の救済がもたらされる。また、ロドルフは、シュリヌールに2度にわたって命を助けられ、最後は、シュリヌールが彼の身代わりとなって死んでいく。言わば、裕福な上層階級に属するロドルフが、下層階級の労働者と娼婦に、その肉体と魂を救われる構図となっているのだ。それは、この小説が1840年代に執筆されたことと無関係ではないように思える。というのも、40年代は、下層階級に対して、それまでの時代とは違う認識がなされ始めた時期と言えるからである。例えば、1834年から35年にかけて書かれたバルザックの『金色の眼の娘』 (*La Fille aux yeux d'or*) の冒頭場面で、シューの作品と同様に、パリは「地獄」に喩えられている。しかし、最下層のプロレタリア階級は、パリの町を取り囲む「最も淫らなヴィーナスの帯<sup>93</sup>」として、パリ周縁のバリエール付近に位置づけら

92 フルール・ド・マリーの死の誤報を受けた時、ロドルフは「私の子どもの中に私の罰が課せられた」(1170) と嘆いている。また、娘が過去を恥じて修道院に入る決意をした時、「神の復讐はまだ満たされていなかった。それはいまだに、私の娘の幸福の中で、私を追跡している」(1284) と述べている。

93 Balzac, *La Fille aux yeux d'or*, Pléiade, t.V, 1977, p.1041.



れている。1830年代はまだ、バルザックを初めとするブルジョワの意識の中では、貧しい労働者階級はマージナルな存在であった。犯罪者もヴォートランのように例外的な人物、「偉大な犯罪者(*grand criminel*)」の時代であった。それが40年代になると、犯罪は人格的な要素を失い、匿名の大衆の形で都市を埋め尽くすようになる。ルイ・シュヴァリエが指摘しているように、40年代以降、「貧困はマージナルな現象であることをやめ、事物の中心となった<sup>94</sup>」。従って、ロドルフがシュリヌールとラ・グアールズに初めて出会った場所が、パリの中心部シテであったのは偶然ではない。それは、ブルジョワ階級による、民衆の存在の発見であり、しかも社会の中心の奥深くに民衆が存在していたのだ。ロドルフが二人に助けられるのも、シューが、1848年の二月革命につながる民衆の時代の到来を予感していたためかもしれない。

シューの作品は、クーパーやバイロン風の海洋小説からウォルター・スコット (Walter Scott) 風の歴史小説へと、その時々流行や時代精神に応じて変化してきた。40年代に入って民衆が注目を浴びるようになると、彼は「民衆の書物」として、『パリの秘密』を世に送り出した。この作品に刺激を受けて、バルザックは『娼婦盛衰記』(*Splendeurs et misères des courtisanes*)を、ユゴーは『レ・ミゼラブル』を生み出すことになる。このように、シューは大衆作家として、誰よりも時代精神をいち早く掴み取り、それを作品の中に反映する力を備えていた。娼婦に関して、『パリの秘密』には「高級娼婦 (*courtisane*)」は一人も登場せず、従来の文学作品がまともに取り上げる対象ではなかった「下級娼婦 (*prostituée*)」に脚光を浴びせている。しかも、娼婦を貧困や無知など、当時の社会が抱える問題と密着させて描くと同時に、ロマン主義的な象徴性も持たせているのだ。それが多くの大衆を引き付けた要因と言えよう。

---

94 Louis Chevalier, *op.cit.*, p.156.

## 参考文献

- Alquier (Aline), « La Grisette au XIXe siècle. Une sorte de précurseur », in *Les Amis de George Sand*, Nouvelle Série N° 12, 1991.
- Atkinson (Nora), *Eugène Sue et le roman-feuilleton*, A. Nizet & M. Bastrard, 1929.
- Balzac, *La Fille aux yeux d'or*, Pléiade, t.V, 1977.
- Bory (Jean-Louis), *Eugène Sue*, Hachette, 1962.
- « Eugène Sue vu par Alexandre Dumas », *Document* dans *Les Mystères de Paris*, Bouquins, Robert Laffont, 1989.
- Chevalier (Louis), *Classes laborieuses et classes dangereuses*, Plon 1958 / éditions Perrin, 2002.
- Corbin (Alain), Présentation à son édition Parent-Duchâtelet, *La prostitution à Paris au XIX<sup>e</sup> siècle*, Seuil, 1981.
- Desprez (Ernest), « Les grisettes à Paris » dans *Le Livre des Cent-et-un*, Ladvocat, 1832, t.6
- Esquiros (Alphonse), *Vierges folles*, E. Dentu, 1873.
- Eugène Sue*, *Europe*, novembre-décembre 1982.
- Frégier (H.-A.), *Des classes dangereuses de la population dans les grandes villes, et des moyens de les rendre meilleures*, J.-B. Baillière, 1840, 2 vol.
- Galvan (Jean-Pierre), *Les Mystères de Paris, Eugène Sue et ses lecteurs*, 2 vol, Harmattan, 1998.
- Huart (Louis), *Physiologie de la grisette*, Aubert et C<sup>ie</sup>, 1841.
- Janin (Jules), « La Grisette », in *Les Français peints par eux-mêmes*, L. Cumer, 1840, t.1
- Jarbinet (Georges), *Les Mystères de Paris d'Eugène Sue*, Société Française d'Éditions Littéraires et Techniques, 1932.
- Juin (Hubert), Préface des *Mystères de Paris*, Complexe, 1989.

Lacassin (Francis), *Préface des Mystères de Paris*, Bouquins, Robert Laffont, 1989.

Lanoux (Armand), *Introduction des Mystères de Paris*, Bouquins, Robert Laffont, 1989.

Murger (Henry), *Scènes de la vie de bohème*, Folio, Gallimard, 1988.

Parent-Duchâtelet (Alexandre), *De la prostitution dans la ville de Paris, considérée sous le rapport de l'hygiène publique, de la morale et de l'administration*, J.-B. Ballière, 1837, 2 vol.

Pessin (Alain), *Le mythe du peuple et la société française du XIX<sup>e</sup> siècle*, PUF, 1992.

Rétif de la Bretonne, *Le Pornographe*, Slatkine Reprints, Genève-Paris, 1988.

アドレル (ロール) 『パリと娼婦たち 1830-1930』高頭麻子訳、河出書房新社、1992年

小倉孝誠 『『パリの秘密』の社会史ーウージェーヌ・シュールと新聞小説の時代』、新曜社、2004年

鹿島茂 『馬車が買いたい！ー19世紀パリ・イマジネール』、白水社、1990年